(氏名) 矢　野　修　一	(学部)　経済学部

1　重要事項

◇共編著；

『アジア経済論』（文眞堂、2022 年）の共同編著（全 16 章）に関わり、自身も第 12 章「経済発展と民主主義―デジタル化の光と影」を寄稿した。

◇共著；

高崎経済大学地域科学研究所編『地方製造業の躍進―高崎発ものづくりのグローバル展開』（日本経済評論社、2022 年）に、第 10 章「国際化・高付加価値化・連携による老舗家具メーカー発展の模索」を寄稿した。

◇論文；

『高崎経済大学論集』第 64 巻第 2 号（岡田和彦教授退職記念号）に「『埋め込まれた自由主義』の再検討と『多角主義』への示唆」を寄稿した（59-78 頁）。

同号巻頭に「岡田和彦先生との思い出」も合わせて寄稿した。

◇ブックレット；

上掲『地方製造業の躍進』のダイジェスト版である高崎経済大学地域科学研究所ブックレット⑥に第 8 章「馬場家具」を寄稿した。

◇ブックレット；

高崎経済大学地域科学研究所ブックレット⑦『高崎からのグローカル人材育成―高大コラボゼミの 12 年』（全 54 頁）を執筆。2010 年度から行われている高経附 3 年 1 組との「高大コラボゼミ」について、高・大卒業生へのアンケート結果も踏まえ、その理念・目的・成果をまとめるとともに、今後の課題を検討した。

◇資料；

コラボゼミを経験した高・大卒業生へのアンケート結果を「資料」として『産業研究』第 57 巻第 2 号、2022 年（57-78 頁）に収めた

◇高経大学生と高経附生徒による「高大コラボゼミ」の企画および指導；

2010 年度～2020 年度に続き、日本企業のケーススタディを柱とする「高大コラボゼミ」を企画し、オンライン／対面併用で各種指導を行った。経営支援ＮＰＯクラブの支援を仰ぎつつ、学生・高校生による IHI、グローリー、スマートキャンプなど全国各地の企業のオンライン訪問・インタビューをアレンジし、成果発表会（高経附、9 月 7 日）につなげた。

◇『高大コラボゼミ 2021 年度成果報告書』の編集補助；

2021 年度の高大コラボゼミに取り組んだ大学生の感想・コメントをとりまとめ、成果報告書の編集を補助した。報告書は、高崎市議会議員を含め、関係各方面に配布された。

◇高崎経済大学矢野ゼミナール卒業論文集『経済学研究年報』第 29 号（2022 年 3 月刊）の監修および編集；

1994 年 3 月の創刊以来、『経済学研究年報』の監修・編集を継続。2021 年度も総勢 12 名の卒業論文の執筆を指導し、300 頁を超える卒業論文集を完成させた。例年通り、高崎経済大学経済学会の懸賞論文で複数名の入賞者を出した。印刷・製本された卒業論文集は、本人のほか、保護者やゼミの後輩らに配付された。

2　その他の事項

◇アジア・コンセンサス研究会；

長年継続している他大学研究者とのアジア・コンセンサス研究会における発表・

討論を行い、共編著『アジア経済論』の出版につなげた。
◇地域科学研究所研究プロジェクト「日本における『持続可能な地域』実現の展望と課題―ガバナンスと域内経済循環の観点を中心に」;
上記研究プロジェクト（通称 SuCoP）を主宰し、オンラインで研究会を実施した。
◇高校生向け講演・講義等；
高崎市立高崎経済大学附属高校 1 年生・2 年生向けに、群馬イノベーションアワード参加に向けた事前講義を行った（7 月 26 日、高経附)。また第 1 学年ディベート大会でジャッジを務めた（2 月 9 日、高経附)。
宮城県立石巻高校で出前授業「SDGs を考える」を行った（10 月 12 日、オンライン)。
◇学部ゼミ生向け就活サポート事業；
昨年度同様、卒業生による恒例の就活サポート事業（エントリーシート作成指導や模擬面接など）を Zoom で開催した（2022 年 3 月 12 日)。
◇群馬県立前橋女子高校スーパーサイエンスハイスクール（SSH）運営指導委員；
運営指導委員会（1 月 22 日)、SSH 成果発表会（3 月 14 日)、SSH ポスター発表会（3 月 4 日）に参加し、助言や意見交換を行った。
◇ポシビリズム研究会主宰；
1998 年から活動を続けるポシビリズム研究会（ゼミ卒業生との研究交流、共同研究を目的とする）は実質的には開店休業状態だったが、大分大学との「世界経済論」合同ゼミ（2021 年 12 月 11 日、Zoom 開催）の機会を利用し、メンバーと意見交換等を行った。

3　次年度以降の計画・抱負

昨年度は、不慣れなオンライン授業の準備に時間を割かれ、研究面での成果は捗々しくなかった。昨年度中に仕込んだネタの幾つが今年度、公刊されたのはよかったが、混迷極まる世界情勢の理解と研究の進捗を目指し、来年度は一層精進する所存である。
県外出身者が多く、中期日程入試の定員が大きな本学、すなわち「不安」と「不満」を抱きがちな学生のあふれる「全国型公立大学」において、充実したゼミ活動などを通じ、次世代を担う若者に向けて「3 つの出会い」(「人との出会い」「ものの見方・考え方との出会い」「新たな自分との出会い」）の場を今後も提供し続ける。
定年まであと 4 年。32 年目のシーズンを研究面でも教育面でも充実したものにしたい。